

幼 児 の 心 理

— 2 —

お茶の水女子大学教授

波 多 野 完 治



第二講

幼 児 心 理 の 發 展

社會性の發生

あかん坊と幼児とのちがいは、幼児になると「制限」が多くなることである。

赤ちやん時代も勿論制限はある。考えようによつては、赤ちやんの方が不自由だともいえる。しかしこの不自由は自分の身体や心の「きかない」不自由さである。これに反して幼児になつてからの不自由さは、自分の身体や心は「利く」のに、それが外の社会から制約を受けるといふ意味での不自由さである。

赤ん坊のときには、命令、禁止等、による自由の制限はない、自分ではやれるのに、他の人が「いけません」というために行えないというような事態は赤ちやん時代には夢にも考えなかつ

たことである。ところが幼児になるとこれがでてくる。

ところで、大人になるとこの制限はもはや幼児時代のような「わずらわしさ」を失つてしまふ。大人は長いことかかつて、このような命令や禁止に対する「慣れ」を獲得するのである。だから大人には制限がもはや制限では無い。「心の欲するところに従つて」なりをこえず。」という孔子の心境にはほぼ遠いが、少くとも一般社会の要求する程度の制限には自然にかなつてゐるのである。

このことから幼児には「社会」が特に命令、抑圧、禁止の力としてあらわれる。ということがおこつてくる。赤ちやんには社会を社会としてうける力がまだない。小学校にでも上るようになる、一通りの行為は社会化されてしまふ。いわゆる

「おとな（柔和）になつた」

のである。ところが幼児はまさにその「大人」又は「柔和」になる途中の段

階である。

今ここでとりあつかつてゐるのは幼児といつてもその前期、特に二歳三歳位のとぎの年ごろだが、この年ごろは子供がとかく泣きむしになり、カンシヤクをおこしやすく、不きげんなことの多い年齢である。すいぶん健康な、きげんのいい子でも、二才から三才というやや早い工合がわるい。その一つの理由は上のように社会の制限が急に強化され、又子供がそれを「自覚」し、「意識」しはじめるという事情にもとづくのである。

かようにして子供は幼児になつてはじめて「社会」を知る。しかも社会をまず「制限」「命令」「禁止」として知る。勿論大きい愛情の中での「命令」として知るのはあろうが、こういう知り方は教育にとつても、子供の成長にとつてもあまりのぞましいことではない。それで今日では子供の禁止をできるだけへらそう、という傾向があらわれている。子供に対する禁止はごく

ごくの最小限にしておいて、あとは自由に、きままにさせる。これは大変いいことなのだし、これによつて子供はのびのびとした人格を發展させるに相違ないのであるが、しかし、子供がこの命令においてこのような事態を「知る」という事情はうごかすことができな

い。子供は生後一ヶ年前後で人みしりをはじめめる。これが子供の社会生活の第一歩である。しかしこれは子供の目の前にでてくる「絵」の相違にすぎない。今まで子供の目の前にあらわれる「絵」は父又は母をふくんだ「みなれたガクブチ」の絵であつた。今それとはちがつた変な絵が、変なガクブチの中にあらわれた。そこで子供はいやなおもいをし、泣くのであろう。こんな風に赤ん坊の知覚は「絵」の連続にすぎない。

幼児になると、運動能力の発達にもなつて、この絵と運動とがむすびつく、つまり絵と自分の運動とが相互に

浸透する。この相互浸透の過程において、幼児は禁止を経験する。これが、「社会」なのである。自分の欲望の前にたちふさがり、自分の欲望をおさえる妨害物——それが幼児の経験する社会なのである。子供が二才前後において物を「物」として把握しはじめるとき、即ち「物」の恒常性、永続性、不可入性等を知りはじめるとき、子供にこのような禁止があたえられるという事態が「本質的」なのである。

だが、子供にはもう一つ社会のあたえられる機会がある。それは子供の目にうつる「絵」が変化する。という事情である。子供は二才前後まで主として家の中に生活するのであるが、その家の中の「状況」は刻々にかわる。

今いた父がいなくなり、その代りに母が入つてくる。そうかとおもうと又別のなきごえがする。

こういう風に、自分のふくまれてゐる場面、状況が變化するということその変化を通じて主役をなしているもの

があり、しかもその主役は場面の變動を通じて同一にとどまる。ということの認知、これが「他我」の認識のはじめである。つまり「人間」というものの発見がここに成立するのである。子供は一才半位から二才のころにかけて「物」を「物」として認識しはじめる。「絵」は目をつぶればきえうせてしまふ。目をあげば又出てくる。しかし「物」はこつちが目をつぶつたり、目をあいたりするのは無関係に、外に存在し、永続的である。だから物にハンカチをかけて物をおおつても、一才半以上になると、そのハンカチをどけて物をとろうとする。それ以前では、ハンカチをかけると、もうその物をとろうとしない。(ピアジェの実験)

このような恒常性が人間に適用されるには少し時間がかかる、なぜなら物は急に変化はしない、自分ではうごかないが、人間は着物をかえたり、化粧をしたり、目の前でないたり、わらつたりするからである。しかし二才前後になるとこういうことが解つてくる。ところでこのような人間は、子供の最大の関心の対象になる。家庭の中の「他我」はたえず子供にはたつきかけらる。彼等は子供に命令し、禁止し、わらいかけ、共にあそぶ。又子供の欲求は多く他我を通じて実現される。こうして、他我は子供の

(1) 感覚 (2) 感情

の分化に大きな影響を与うるのである。他我における感覚は大部分感情とむすびついている。即ち顔又は身体のごくさつまり表現みぶりとして把握されねばならないのである。ここから「記号」の意識がおこつてくるが、しかし今の場合もつと大切なのは感情そのものの発展契機とその他我である。なぜなら精神分析学者がコンプレックス(複合)という名でよぶ精神的状態の大部分はこの時機に発生の動機をもつからである。

コンプレックス

コンプレックスとは一つの欲求不満が中心となつて、そのまわりにいろいろな観念又は観念群をあつめ、それがとけがたく錯綜してしまつて、極端な場合には、それが心のしこりのようになつて、精神病の原因になるものをいうのである。

出生コンプレックス

離乳コンプレックス
劣等感コンプレックス

等はその代表的なものである。

ところでこれらのコンプレックスが全部「人間関係」にその基礎をもつてゐることは充分注意しなければならぬ。つまり父や母やその他の人々との「感情生活」がコンプレックスの発生のもとなのである。

特に大切なのはこの時機に弟や妹がうまれることである。弟や妹が生れなくとも、兄や姉でも、子供はこの時機にその存在をはじめ意識するのであ

るから、それが大切なことはいうまでもないが、弟や妹の生れることはことに重大である。なぜかという、弟や妹は、今までなかつたものであり、自分たちの生活の中に不意に侵入して行くものであり、自分の生活の規則を目茶目茶にして下うものだからである。

弟や妹が生れるまで、自分が一家の中心であつた。父や母の愛を一手にあつめていた。今はそうではない。自分が今までとりあつかわれていたのと同じように、新しくうまれたものが、とりあつかわれている。

ここに「シット」という感情が出てくるが、今の場合大切なのは、この感情そのものよりも、この感情によつて彼の世の中をみる見方がかわつてくるということである。

即ちここに價值感のはじめがめばえてくる。又、一家の中で、時に応じて、人の関係がかわつてくる。ということがわかつてくる。

「物」はやはり場面に応じて変る。

あるものはヒルマは唯の芽であるが、ヨルは心ばり棒になり、こしかけは時として、フミダイとなる。人間にも時としてそういうことがある。しかし、人間の場合には、これにもう一つの特性加わる。それは、人間は、場面に応じて役割を変化しつづしかもやはり個人としての性質を保存している、ということである。父は外では会社員であるが、家では父である。庭へでは植木を弄り水をまく人になる。

赤ちゃんの時代にはこういうことは唯そのものとしてうけとられるのであつた。これをピアージェエは「唯現象論」(フエノメニズム)といつてゐるが、現象がそのままあたりまえの事としてうけとられているのである。ところが幼児前期になると、そのいろいろの役割を通じて、「父」という一貫したものがあつて、それがわかつてくる。

「多様の統一」

この言葉はルネッサンスの時代によくつかわれた言葉で、特に古典美術の

性格を示すのにつかわれるが、今の場合これはそのまま幼児の心にあてはまる。幼児は父が会社へ出かけて、ごはんをたべ、庭で水まきをするという多くの役割を通じて然も同じ「父」として止つてゐることを掴むのである。

おそらく、子供は、父にはたらきかけてみてその事を会得するのであらう「お父さん」

とよぶと、庭で水をまいてゐる人はたちまち「父」にかえる。こういう実験的な操作(オペレーション)それは赤ん坊の時代にはないことである。とに角幼児がどのようにして他我をみとめるばかりでなく、他我に「統一的人格」をみとめるようになるということは大切である。

意味の發生

なぜかという、一つはこれによつて子供が、「あらわれているもの」と「その背後にあるもの」その差を知るようになる、ということがおこつてく

るからである。

「あらわれているもの」

これを現代の意識学ではシニファイエ
SIGNIFIE となすけ

「あらわすもの」

これをシニファイアン、SIGNIFIANT-
E と呼ぶていう。父は今庭で木に水を
やつてゐるが、それでもやはり父は父
なのである。つまりむずかしいいえば
「本質」と「現象」

という二つのことが初歩的にわかりは
じめる。

さて、このことはコトバの發生及發
達に大変な關係がある。社会的人間に
ついでに「多様の統一」の自覺と、コ
トバの發生とどつちが先か。これは仲
々むずかしい問題だが、おそらく發生
的にはコトバの方が先であろう。

しかしコトバにもいろいろある。が
らがらのおもちやをがらがらといひ、
犬をワンワンというのは、いわば部分
をもつて全体を指すので、子供にもか
なりやさしい。ワンワンは犬のなきご

えであり、子供は実際にこれを經驗す
ることができる。

筆者のうちの子供はウマのことをヒ
ンヒンとおしえられたが、これをなか
なかおぼえなかつた。おしえてもおし
えてもわすれるのである。しかし、こ
れをパカパカとおしえたらすぐにおぼ
えた。ウマをみれば、それはいつもパ
カパカと音をたててゐるからである。
ある。これに反して、子供がみている
とき、ウマが「ヒーン」となくことは
めつたにない。こういう經驗をしない
かぎり、ウマを「ヒンヒン」というこ
とは高次の意味賦与の經驗になるので
あろう。ウマをパカパカと命名するこ
とは部分をもつて、全体を指すので、
低次の體驗である。このような「意味」
體驗ならば、一才前後からすでに存在
しうるのであろう。

しかし、「人間」的存在における多
様の統一の自覺は高次の意味體驗の前
提として必要なのではなからうか、少
くともこのような高次の意味作用と、

社会的人間における多数の統一の心理
作用とは手をたずさえて發達していく
ものに相違ない。事実、子供の言葉の
量(単語)は、二才から三才までの一
年間に著しい増加を示すのである。言
葉の多くは、シニファイアンと、シニフ
イエとが、人工的にむすびついたもの
である。ワンワンと犬というように、
工合よくくつついてゐる場合は少な
い。二本の棒をハシというのでは、シ
ニファイアンとシニファイエとの關係はす
ぐむすびつかない。こういう人工性は
言葉の特色である。

幼児語は大人の言葉に比べてこうい
う人工性が少ない様に工夫してある。

自動車をブーブー

自転車をチリンチリン

牛を モウモウ

等はシニファイアンとシニファイエとの間
に必然性がある。これは低い心性に適
応した、命名であり、この点から幼児
語を使わずに、いきなり標準語を學ば
せるべきだ、という主張は少くともこ

く小さい幼児の場合には無理な、非心理学的な議論だということが出来る。

四五才ころにもなれば、子供は勿論高次の意味意識を発達させているのであるから、標準語を中心として言語使用を奨励せねばならない。

自 我

もう一つの重大なことは、このような他我の発見によつて、次に「自我」が発見される契機をつくる、ということである。

昔の心理学では自我は生れたときからあるので、他我が後で見出されるのであつた。然し自我が後から見出されるものであることはフロイトがまず明きらかにし、ついでピアジェ、ワロン等フランスの心理学者たちによつてほぼ定説として確立された。

他我が多様の統一として把握されるためには「記憶」が発達してきていなければならぬ。「以前の」人間が、「今」かわつてでるからこそ、「多様

の統一」ということがあるのである。

子供の前で変なかおをしてみせる。

一才以後の子供はどんな顔をしてみせてもおどろかずにわらつてゐる。これはその変な顔の背後に「父」又はおじさんを認めてゐるからなのである。

このようなことは「意味体験」がなくてはできないか、又同時に「記憶」がなくてはできない。

「時間の連続」ということは、他我がばかりでなく自我にも適用される。今まで（赤ちやん時代）子供はおなかがすけば食事をほしがり、目の前にあらわれればおもちやをほしがつた。しかし、今では子供はおもちやのしまい場所をしつており、自分で行つてそこからおもちやを出してくる。これは自分の過去の「行為」が現在まで連続していなければできないのである。

自我は多くの「我」（他我）のうちで特別な存在である。全ての「知覚」が自我のいろいろな部分を起点としてゐる。たとへば、自我からのへだたり

に依じて、同じものが、小さくみえたり、大きくみえたりする。

こうして、自我は多くの我のなかで特殊の意味を獲得する。子供のあらゆる行為はこれから後、この「自我」の恒常連続という点から計画され、遂行されることになる。つまり環境との調整が自我を起点として行われることになるのである。

これが出来るようになるのが満三才のことである。これから以後、子供に一つの特性が出現する。それは「自己中心性」である。

今まで、子供は欲望の充足をもとめた。しかし、それは「自己の欲望」の充足ではなかつた。鉄片がジシヤクに引きつけられるように、欲望の充足がもとめられたにすぎない。三才以後、四五才のころの行為はそれとはちがう。それは自我を起点とする新しい行動調整のおこなわれる時期である。これを幼児後期とする。